燃え上る経営者のガン首
空から首切り状を返上

四日夜、三池鉱業所の表門、裏門、山の上クラブ前に警戒と門確保のため、急遽動員された行動隊員たちがもやした大かがり火と、クビ切り合理化をハネかえす意欲をこめた、組合員とその家族の怒りの火は、ひとところあらあらしく降りつけた冬雨に消えなかつたばかりか、ついに五日〝クビ切り状返上デモ〟決行の朝には、それまで空をおおつていた黒雲をふきとばしてしまつた。

いよいよ〝クビ切り状〟をたたきかえす日である。午前十時本所裏の広場に結集した三万の家族は「団結刀」をかざして、クビ切り幹部のガン首をかついで赤旗をおしたて、幹部が逃げこんでいる山ノ上クラブにおしかけた。

ものものしいバリケードをめぐらし、かたく門をとざした奴等に〝クビ切り状〟はヘリコプターで空からたたきかえし、団結刀できりとつたガン首は、クラブ前で火あぶりの刑にした。

こうして、団結ぜんざいで全国の仲間たちの同志愛をかみしめ〝クビ切り状〟をたたきかえしたおれたちは、新しい決意をかためて、一九六〇年のたたかいにたちあがつたのだ。

本社正門を徹夜で確保

首切通告状返上のデモは会社の意表をついて、一月五日と決められた。

ところが四日午後にはもう会社幹部は、山ノ上に逃げこんでしまつた。

本社正裏門、山ノ上門前に行動隊を動員して、通告状返上のため徹夜で両門を確保することとなつた。

その夜、凍てついた空は、いまにも氷雨を降らしそうなけわしさで、焚火を囲む隊員の背を、寒風は容赦なく吹きまくつた。

本部からとどけられたたき出しに空腹を満たしつつ、きびしい寒気とたたかいながら、ひたすら夜明けを待つた。

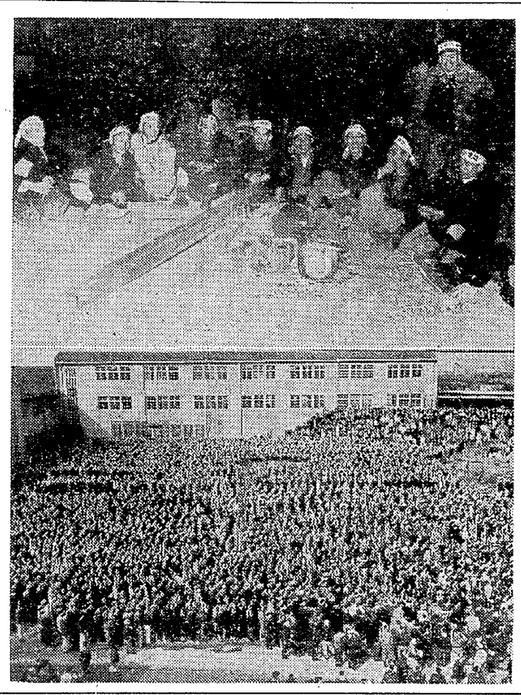
夜が暗ければ暗いほど、寒気がきびしければきびしいほど、それに堪えつづけて迎える夜明けのひかりは愉しい。

明けて五日、全組合員と主婦会員三万は、港務所を先頭に本所、宮浦、四山、三川と午前十時には広い本社裏広場を上段下段とも鉢巻の渦で埋めつくしてしまつた。

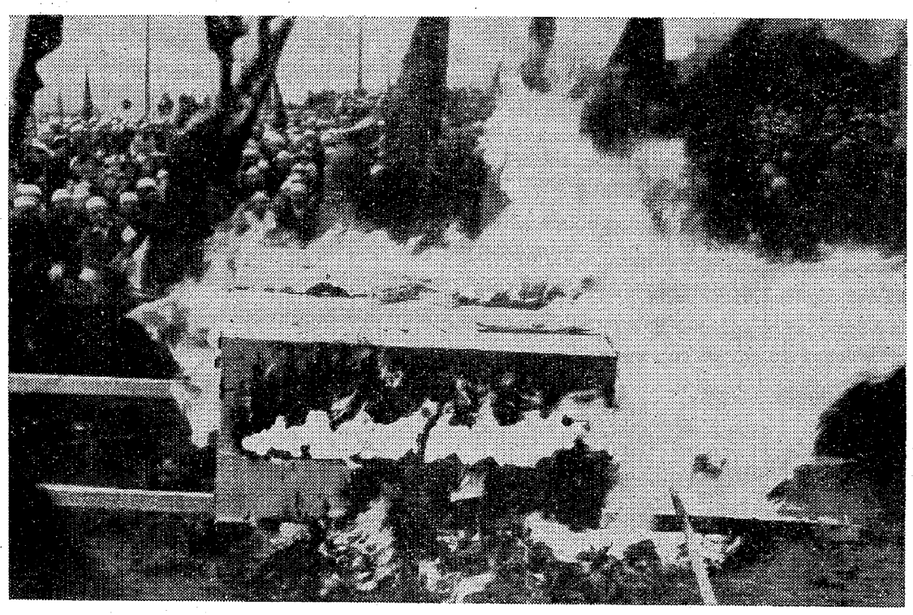
中央には各支部から首切りの返礼としてこしらえられた栗木幹（三井鉱山社長）若林寿雄（三池鉱業所長）らの生首が棺の上に乗せられてひきだされ、無能経営者の首をたたきおとした誓の「団結刀」が飾られた。

ニュースカーの上に組合長がたつて、クビ切り撤回まで徹底的に闘いぬく断固たる決意をのべれば、三万の大群衆が勝利の確信をこめた万雷の拍手をおくる。

つづく書記長、野口炭労副委員長、総評・大地評代表の挨拶にも満場の拍手。たたかいにたいするためらいはみじんも感ぜられない一九六〇年をわれらの勝利の年とし、さらに労仂者解放への前進の年とする決意は、三万のまなこにみなぎつている。



山ノ上に爆發した地底の怒り



山ノ上にデモる
燃えろ不当首切元兇の首

本社裏に勢ぞろいした三万は、三隊にわかれて山ノ上に押しかける。

やがて巨大な焚火を中心に、団結刀、栗木若林の生首、赤旗の集団が、本隊から離れてはげしい気勢を見せながら、急調のデモに入る。するとその一団を取り囲みながら、本隊が気勢するどくデモりつつ広場の所定位置に向う。

しかし、それだけではどうしようもない不消化な怒りが、はけ口をもとめていきりたつ焚火を囲んでデモる一団は遂に憎んでも余ときはよし、その喚声にこたえるように、空の一角からすさまじい爆音が近づく、待望のヘリコプターである。

デモ隊の中心で、突然爆竹があがる、続いて二つ三つ四つ、それが鎮まると、一際高く組合長の声がスピーカをついて響く。

「みなさん、いよいよわれわれの退職通告状を只今からヘリコプターで上空からたたき返します」

すさまじい拍手と喚声。

「返すぞッ、返すぞッ」と声をはりあげて叫ぶ主婦の声は、涙でかおお、われわれの胸を切りさいなんだあの退職通告状が、無数の紙片となつて山ノ上の敵の根城の真只中におちてゆく。

ヘリコプターによる首切状投下に狂喜する三万の仲間

爆発の日（一九六〇・一・五）

四山　蓮尾　蒼馬

ゆれる！ゆれる！
バカバヤシとクビキリカンの
二つの首
団結刀をふりかざし
追ひ打つ坑夫らの
怒濤の足音

まはれ！まはれ！
ピイツピー　ワツショイ！
次から次へと
流れる河のように
がつちりと、スクラムを組む
三万五千の坑夫、主婦
「解雇状唯今返上」
どの顔も今日は明るい
昨年来、溜り溜つていた
怒りの、爆発の日

にかつがれた巨大な団結刀（宮浦）

〝団結刀〟よ誇らかに輝け

各支部ごとのデモも終り近づいた頃、進行係の永田教宣部長はマイクでどなつた。

「皆さん、団結刀は焼かないで大事に持帰つて下さい。団結刀はわれわれの団結のシンボルであり、栗木幹、若林寿雄の生首を斬りおとした誇りある記念品ですから、各支部で大切に保存して下さい」

丹誠こめてつくつた生首も、棺も、高札も劫火のなかに焼かれたが、団結刀だけはこの日を記念するものとして支部旗とともに引揚

喚声に混つた感動の涙声。しかしこれで胸の痞が消えて、あらたな闘争意慾がもりあがる。

港務、本所の返上デモが終ると、宮浦、四山が入れ替つて、はげしくデモりはじめる。すでにさんざんいためつけられた栗木、若林らの首は、ついに棺から落されて焚火の焔のなかに——。

油が注がれたか、焔は黒煙に変り、凄ととともに冬天たかく舞いあがる。その黒煙を追ういかりの焔、メラメラと燃えあがる焔の間におれたちのクビを切つた奴等の蒼白い首が、一瞬苦渋の表情をみせて、たちまち焔の塊りとなつて爆ぜる。

その廻りを、廻る、廻る。なおたたかう力をづつしりとたたえたたくましい貌々。

デモる組合員の顔には、一抹の暗いかげもない。はげしく、するどくデモりながら、たたかれ、崩れ、つぶされ、燃やされる哀れな生首に、あかるい爆笑を投げつけて、さらに気勢をあげる。

「クビ切り通告状」が投げ返され、生首が焼かれると、また爆竹が凍天を引き裂いて爆せ組合長の音頭で「団結頑張ろう」だ。

力強く一斉に突き出されるこの鉄拳に、突破られない障碍があるものか。

クビ切り幹部たちが賃金、期末手当の不払いの兵糧攻めや、勝手なクビ切りをおしつけてきて、おれたちのすむ道はたしかにけわしい。

だがおれたちは、それをふみこえてゆくたくましいスクラムでむすばれている。

おれたちの未来は明るくひらけているのだ。

クビ切り状をたたきかえし、クビ切り幹部の生首を火あぶりにしたおれたちの怒り、地底からわきあがつてくる怒りの火が、すべての障碍をやきはらつて力強くつきすすんでいくおれたちの道をひらくのだ。

渦巻く興奮の中で
＝私も返上デモに参加した＝

行け山ノ上へ！本社裏広場から奔流のように流れ出したデモの列に交つて、私も仲間と腕を組んだ。

ブルン、ブルン、ブルン曇天をふるわせてデモ隊の上をヘリコプターが飛び去つた。第一陣の首切り状が投下されるのだろう。

いよいよ私たちの番だ。クラブの板塀をにらみつけて思わずスクラムに力が入る。〝ワツショイ、ピツピー〟かけ声もはずみ額に汗が滲んでくる。

広場の渦巻きに身を投じて、何ともいえぬ興奮が身内をかけめぐつていくのを感じた。

労仂者の怒りと喜びをかつてこれほど味わつたことがあつたろうか。腕を組んだ横の仲間の顔も、興奮でほてつてゴラゴラ光る。ワーロ

第一回の首切状投下（書状は全部山ノ上構内に落下した）